九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[029]九州人類学会報表紙奥付等

https://hdl.handle.net/2324/2338935

出版情報：九州人類学会報. 29, 2002-07-06. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

九州人類学研究会設立30周年によせて

綾　部　恒　雄
（筑波大学名誉教授・
九州人類学研究会初代会長）

九州人類学研究会（以後九人研と呼ぶ）が設立されてからちょうど30年を迎えようとしている。今から22年前の3月、私は九大を離れ筑波大へ転出したが、その頃の九人研は8年目を迎え若い気運に溢れていた。若い有能な教え子たちが、続々と育ちつつあった。こうした九人研を残していけるということが、私をして筑波大学へ転出することに踏み切らせた大きな理由のひとつだったといえるだろう。九人研設立の前史として、多少私的なことも交え、九大における文化人類学の“歴史”を記してみたい。

九州大学に文化人類学の最初のポストを設置されたのは、九大の初代教育学部長をされた故平塚益徳先生である。九大の教育学系の講座は、文学部の中に設けられていたが、戦後、講座増を得て、教育学部として文学部から独立している。平塚先生は従来、ペスタロッチやジョン・デューイなどの影響が強く、とかく教育哲学的な方向へ向かいがちであった日本の教育学に、比較教育学や文化人類学など国際性をもった講座を積極的に採り入れていくことに努められた。また、稀にみる政治力・行政力をお持ちで、日本初の、教育学部付属施設としての比較教育文化研究施設（以後比研と呼ぶ）2部門の設置を実現された。“比較教育研究施設”でなく“比較教育文化研究施設”と命名したところに平塚先生の面目躍如たるものがある。比研2部門のうち第一部門が「日本およびアジアにおける教育文化の研究」、第二部門が「欧米における教育文化の研究」であった。平塚先生は早速適当な文化人類学者を探され、当時福岡の「アメリカ文化センター」に勤めておられた吉田禎吾先生（東大名誉教授）を比研第一部門の助教授として招聘されたのである。吉田先生は東大文学部の心理学科を卒業されたあと、ガリオア基金による戦後初の留学生としてオレゴン大学に行かれ文化人類学を学んで帰国、「アメリカ文化センター」に勤めておられた。戦後旧制七帝大の中で東大に次いで九大で文化人類学の講義が始められたのは、こうした事情からである。比研が設置されてから行われた最初のプロジェクトは「ヨーロッパの道徳教育」に関する調査であったが、次に行われようとしていたプロジェクトが東南アジア調査であった。

そこで、東南アジアを専門としている文化人類学研究者を採用する必要があり、当時ラオスとタイの農村調査（1957～1958）を終えて東京都立大学の社会人類学研究室の助手をしていた筆者に声がかかった。九大からの話があった時(1960年7月)、私はフルブライト交換留学生としてカリフォルニア大学（UCLA）の大学院へ行くことが決

まっていた。都立大の助手職を辞して旅立ちすることになっていた私は、帰国後九大へ赴任することを承諾した。仲介の労をとって下さったのは祖父江孝男先生（国立民族学博物館名誉教授・元放送大学教授）で、祖父江さんは、都立大における私の先任助手であった。石神井の祖父江さんのお宅で私は初めて吉田先生にお目にかかった。吉田先生が「博多は日本の最果てですよ。かまいませんか」と私に言われたのが、今でも昨日のことのように想いだされる。当時の日本は中国や韓国との国交もなく、新幹線も通じていなかった。博多駅から夜行列車「あさかぜ」に乗ると、17時間後に東京に着くのである。アメリカから帰国した私は1961年の10月博多駅に降り立った。駅舎は明治時代に作られた赤レンガの建物で、東京駅の百分の一かと思われるほど小さく見えた。私が九大へ赴任するのと前後して、ニューオーリーンズにあるテュレーン大学の故フィッシャー教授夫妻（いずれも人類学者）がフルブライト交換教授として来日し、九大に籍を置かれたので、比研の第一部門は急に活気を呈することになった（比研では江渕一公氏が助手をしておられた）。フィッシャー教授夫妻とは、ホノルルで開催された第9回太平洋学術会議（1961）でお会いしていたので、旧知の間柄であった。私が九大へ赴任して一年半後、吉田先生はスタンフォード大学へ招聘されご家族を伴って渡米され、吉田先生が帰国されて半年後には私が国連の専門職員（国際公務員）としてパリ・バンコクへ赴任し、帰国すると吉田先生は国際交流基金の日本語寄贈講座の教授としてジャカルタへ赴任される、というようなことが続いた。1969年、私がペンシルバニア大学とスタンフォード大学での客員教授としての滞在から帰国し、東京の自宅に滞在中に東大の泉靖一先生から会いたいという電話が入った。泉先生は私が大学、大学院を通して教えを受けた、私の最も敬愛する人類学者であった。赤門のそばにある泉先生の研究室で、先生はすまなそうな顔で「曽野君が亡くなったあと、どうしても補充がつかない。吉田君を東大へ招びたいが、了承してくれないか」と言われた。吉田先生が居なくなった後の九大を考えると、私は目の前が暗くなる想いであった。その後本郷の、泉先生行きつけのレストランで昼食をご馳走になった筈であるが、何を食べたか覚えていない。

さて、ここまでは九人研ができるまでの、いわば前史であるが、私が九大へ赴任した当時の九大の文化人類学（ないしは民族学）をめぐる人的関わり、ないしはネットワークについて記しておかなければならない。先に述べたように、私は渡米前に吉田先生のお誘いを受け、九大へ赴任することを承諾したのであるが、実際に人事が具体化するためには、九大が旧帝大の名残（講座制）を残しているだけに、文化人類学（民族学）という、日本では新しい学問分野を拡大するためには、いくつかの課題があり、多くの側面的支援が不可欠であった。後になって振り返ってみると、こうした人脈について偶然ではあるが、私は極めて恵まれた状況下にあったのだと思う。先ず、教育

学部には、前記平塚益徳先生と東大時代に同期だった故原俊之先生がおられた。原先生は私の恩師故馬淵東一先生（東京都立大学名誉教授）の旧制五高校(熊本)時代の親友であった。「馬淵君の弟子か」ということで原先生は教育学部の教授会で大いに私の人事を推進してくださったと聞いている。また、都立大時代の、私のもう一人の恩師である故岡正雄先生（東京都立大学名誉教授・東京外語大学アジア・アフリカ言語文化研究所初代所長）の東大時代の親友故古野清人先生（E.デュルケム『宗教生活の原初形態』の訳者、「かくれキリシタン」の研究など）は、九大文学部宗教学講座の主任教授としての9年間に、その該博な宗教人類学的造詣とお人柄によって、大きな影響力を残していかれた。古野先生が助教授に招聘された野村暢清先生（九大名誉教授）はやはり文化人類学への関心が深く、（後にメキシコの宗教人類学的調査を長く続けられた）側面からの援助を惜しまれなかった。私の九大就任時には、古野先生は北九州大学の学長を経て、岡正雄先生が明治大学へ転出された後、都立大学社会人類学教室の主任教授となっておられた。古野先生が九大時代に培われた九大文学部、法学部、経済学部、教育学部、医学部における人脈の広がりには眼をみはるものがあった。インド哲学講座の碩学故干潟龍祥先生、法学部で故青山道夫先生（L. H. モーガンの『古代社会』岩波文庫の訳者）の薫陶を受けられた民法（家族法）の有地亨先生（九大名誉教授）も文化人類学に深い関心をもっておられた。また、医学部の解剖学教室には、形質人類学・民族学の泰斗、故金関丈夫先生（『木馬と石牛』など）がおられ、金関先生の学風を継いだ故永井昌文先生が活躍しておられた。さらに、九人研設立について最も強力な推進力となって頂いたのは、文学部社会学講座の内藤莞爾先生（九大名誉教授）であった。内藤先生は終戦直前に設置され、日本の敗戦と同時に廃止された国立民族研究所の所員でもあり、E. デュルケムの諸著作、R. エルツの『右手の優越』などの翻訳（最近本書はちくま学芸文庫に吉田禎吾・内藤莞爾・板橋作美三氏の翻訳として収められている）などによって、社会学と人類学にまたがる活躍をしておられた。後にアメリカの人類学者G. P. マードックの『社会構造』を訳されたのも同教授である。考古学の故岡崎敬助教授（当時）も梅棹忠夫先生との関係で文化人類学に親しみをもっておられた。

九人研が設立されたのは、1972年の9月であるが、当時私は日本民族学会の「九州・沖縄地区」の理事として頻繁に上京していた。民族学会では各地区の民族学研究活動振興のため、地区の会員数に応じて補助金を出していた。「九州・沖縄地区」に割り当てられた金額は4万円であった。小額ではあるが、当時としては有り難い奨励金であった。しかし、この分配金は福岡地区のみで使うことはできなかった。熊本市に住む有力な会員の方から、熊本のほうへも分配金を寄越すようにとの要求があったからである。結局福岡地区を中心とする研究会に2万4千円、熊本地区を中心とする研究会

に1万6千円を振り分けるということになった(途中で熊本地区の研究会は消滅した)。当時の物価を考えても1年間2万4千円では研究会の会場費を捻出するにも無理があった。3〜4年の試行錯誤のあと私は、日本民族学会の「九州・沖縄地区」の研究会を基盤にしつつ、会員制の「九州人類学研究会」を設立し、『会報』を出す計画を立てた。しかし、民族学プロパーの研究者は、大学院生の片多順、波平恵美子、大谷裕文…などの諸君を含めても24名に過ぎず、会報を出すことなど資金のうえでとても考えることが出来なかったのが実情である。私は内藤先生にこうした計画を相談し、内藤先生も大いに力を貸してくださることとなった。ところが、予期せぬ側面からクレームが入った。それは、特に形質人類学関係の方々からの「人類学研究会」という名称についての異議申し立てであった。当時の日本の学界では、人類学といえば、形質人類学のことであり、文化人類学を代表する学会は「日本民族学会」だったからである。ただ私は、アメリカの総合人類学的影響を受けていたこともあり、日本では別個の学会を作っている考古学、言語学、形質人類学などをも含むDepartment of Anthropology的考え方を強くもっていた。私は医学部の永井昌文先生を通じて、九州地区の人類諸科学anthropological sciencesに関心をもつ人々が集まって、自由に討議し、知的交流が行われる場を作りたいだけなのだ、形質人類学の領域を“侵す”つもりなどは毛頭ないことを伝えていただいた。もちろん、永井先生ご自身は、このことをよく理解しておられた。こうした動きは急速に進んだわけではなく、2〜3年の助走期間があったように思う。1970年から71年にかけて、私は文部省の科研費（海外学術調査）の交付を受けて、東南アジアはタイ国の農村調査に8ヶ月ほど赴いた。比研を中心とした調査団構成で、安藤延男（九大名誉教授)、権藤与志夫（九大名誉教授)、松永和人（福岡大学教授)、丸山孝一（九大名誉教授・福岡女学院大教授）その他の諸氏がメンバーであった。教育心理学専攻の安藤氏や、比較教育学の権藤氏等に人類学的フィールドワークの一端を経験していただいたのは、比研、ひいては教育学部にとって良かったのではなかったかと、今でも考えている。ところがタイの調査から帰国した年（1971年5月）私は奇病に罹って入院せざるを得なくなった（結局1年半の入院を余儀なくされた)。教育学部で文化人類学の授業をもっていたのは当然私一人であり、3月まで助手をしていた丸山孝一君は大森元吉氏（当時広島大助教授、現ICU教授）からの依頼により広島大学へ赴任することになっていた。丸山君に続く博士課程終了の院生がたまたま欠けていたため、私は東大の中根千枝氏や増田義郎氏に優秀な大学院修了者がいたら紹介して欲しい旨の依頼を行った。増田氏から推薦されてきたのが小野澤正喜君であった。当時は、激しかった学園紛争がようやく収束に向かい、大学が秩序を取り戻しつつあった頃であるが、増田教授の小野澤君の推薦文のなかに“大学紛争中も、教官に対しての礼儀を失わなかった”という文章があったことを覚えてい

る。こうして、九大教育学部の比研へ助手として赴任してきた小野澤君は赴任2ヶ月後には、私の入院で、教育学部で只一人の文化人類学者として大学院生や学部の文化人類学専攻生をまとめていかなくてはならない状況に置かれた。

話を九人研設立の問題に戻そう。九人研のほうは私の入院前にかなり話が進んでいたが、入院後は社会学の内藤先生が中心になって九人研実現のための具体的な計画を進めてくださっていた。また、教養部の中村正夫教授（社会学）も大いに関心をもっておられた。助手の小野澤君は赴任したばかりで、おそらく全体の状況は正確に掴めていなかったと思うが、ほとんど毎週のように遠い生の松原分院の私のところへ見舞い兼連絡に来てくれた。小野澤君の素晴らしい事務能力、組織力、人柄がなかったら、九人研の実現は、ずっと遅れていただろうと思われる（話はすこし横にそれるが、当時六本松の教養部でも文化人類学者をひとり採用しようという動きがあり、その中心が中村正夫教授であった。私は県あるいは市の農村開発プロジェクトその他の委員会で中村氏と頻繁に顔を合わせており、小野澤君の助手任期切れのあと、本人が希望すれば教養部へ行ってもらうことを非公式に話し合っており、それが実現した。小野澤君が九大教養部から筑波大へ転出したあと、やはり中村先生の努力により、そして吉田先生の推薦により赴任されたのが清水展氏である）。

1972年9月、九州人類学研究会の発会式が医学部キャンパス内にある同窓会館の講堂で開催されることとなった。私は担当医から外出許可をとり発会式に出席した。発会式に漕ぎ着けるまでのいきさつなどについては、内藤教授から説明されることになっていた。式の始まる直前に、控え室にいた私に内藤先生が突然「研究会の会長を決めなくてはならないが、当然綾部君になってもらうよ」と言われた。既に4ヶ月入院しており、先の見通しがわからなかった私は、現在入院中であること、まだ助教授であること、内藤先生は当研究会の設立を強力に支援してこられた先生方の中心的存在であることなどを話し、初代会長は内藤先生にお願いしたい旨かなり強く要求した。しかし内藤先生の態度はいつになく堅く、この研究会は日本民族学会とも組織的関連をもっており、文化人類学（民族学）研究者を中心とする会である以上、学会の理事である君が当然引き受けるべきだとして譲られなかった。“九州人類学研究会設立準備会”を代表して内藤先生は会場に集まった人々に簡単に設立のいきさつを説明し、会長として綾部を推薦したい旨の提案をされた。私は会場の皆さんの拍手の中に壇上に上がったが、何の準備もなく、しどろもどろの挨拶しかできなかったことを覚えている。

この一文をしたためるために、久しぶりに『九州人類学研究会会報』の創刊号を書庫の隅から引き抜いて眺めている。巻末の会員名簿には89人の氏名、専攻、住所がアイウエオ順に載せられている。専攻の内訳は文化人類学26名、宗教学16名、形質人

類学14名、社会学9名、民俗学6名、考古学5名、歴史学1名、法社会学1名、その他１１名となっている。運営委員は文化人類学3名（阿部年晴、江渕一公、松永和人）、社会学1名（内藤莞爾）、形質人類学1名（永井昌文）、考古学1名（岡崎敬）、宗教学1名（野村暢清）法社会学1名（有地亨）となっている。毎月一回開催される研究会で、当時一番苦労したのは会場の確保であった。教育学部の会議室を使用することが最も多かったが、塞がっている場合には同窓会館の会議室や、医学部の永井先生にお願いして解剖学教室の古い階段教室も幾度となく使わせていただいた。永井昌文先生ご自身にも研究の一端を披露していただき、日本本土と沖縄本島とのヒトの交流をゴホウラと呼ばれる大型のイモ貝からつくった貝輪（腕輪）の分布を示されることで大変興味深いお話を伺った。沖縄本島の具志原遺跡や土井ヶ浜遺跡でみつかるゴホウラから作られた貝輪や指輪と同じものが北部九州の弥生前期～弥生中期後半にかけての遺跡から多数出土するのである。ゴホウラは沖縄近海でしか獲れない貝であるから、これが北九州の遺跡から多数発見されることは、弥生時代にすでに“貝の道”つまりヒトの交流・移動があったことを示している。また内藤莞爾教授からは、長期にわたる鹿児島地方の調査にもとづき、当地方における末子相続についてのお話を伺った（後に『末子相続の研究』弘文堂として刊行された）。私は狭い意味での文化人類学ではなく、人類諸科学の人々の集まりである九人研の良さをかみしめながら、これらの話を聞いた。しかし過去50年、社会・人文諸科学は長足の発展を遂げ、それぞれの学会は会員数も増加し、独立性を強くしてきた。

ところが20世紀後半からの国際化の広がり、グローバリゼーションはひとつのディシプリンでは社会・文化の動きを的確に捉えられない状況をもたらしつつあり、ディシプリン間の“越境”は今や常識となっている。九人研の場合も、文化人類学が中心であることは今後も変わらないとしても、隣接諸科学ないしは広義の人類諸科学などに関心のある研究者に積極的に加入してもらうことが、今後の九人研を活性化する道ではないかと考えている。末筆ながら、九人研設立に協力を惜しまれなかった故岡崎敬先生、故中村正夫先生、故永井昌文先生のご冥福を祈りたい。